



特別展

大江戸の華

— 武家の儀礼と商家の祭 —



CONTENTS

- 特別展関連コラム 鹿嶋屋東店に伝わった獅子頭と箱書き
- 企画展 相撲の錦絵と江戸文化
- 令和2年度 新収蔵品の紹介
- 研究の散歩道 レターヘッドに描かれたデ・ラランデ邸

特別展

大江戸の華——武家の儀礼と商家の祭——

7月10日(土)～9月20日(月・祝) 1階 特別展示室 *会期中に展示替えがあります。

大江戸。

この言葉は私たちを過去に誘い、そして活発にして明るい印象を想起させます。都市江戸の実像は、決してそのように受け取れることばかりではないことは自明ですが、さまざまな情報が今日の私たちにプラスの印象を与えています。

今回の展覧会は、この大江戸の活発で明るい印象に注目し、都市江戸が持つひとつの側面を、「大江戸の華」という言葉を通じて、明らかにしようと企画しました。展示では武家の儀礼、江戸の祭りや行事に注目しました。これらはいずれも江戸における生活のハレの場面にかかわります。その様子をさまざまな作品を通して見ると、江戸に生きた人々の明日への活力が伝わってくるように思います。

展覧会は次のように構成されています。

プロローグ

Diplomatic gift

第1章

— 式正 — 武器と儀礼 —

第2章

— 年中行事

— お稲荷さまと雛祭り —

第3章

— 彩りの道具と装い —

憧

エピソード

Gold & Silver

第1章では甲冑や刀剣、乗物など将軍・大名の所用品を展示します。武器は江戸時代以前ではまさに武器であったものが、泰平の世の中にあつては、贈答や装飾などに活用され、武家の権威を表現する道具となりました。

第2章では江戸の大店、鹿嶋屋東店の祭りを覗いてみます。屋敷神であったと思われる富永稲荷は、社殿から獅子頭にいたるまで、祭りのワンシーンを表現するほどに多くの作品が伝えられています。また同じく鹿嶋屋東店に伝えられた雛道具は、武家の所用品にも匹敵する迫力ある作品です。

第3章では婚禮道具や衣装から、武家女性の華やかさを表現します。将軍家にかかわる婚禮調度は梨子地の作品も多く、とりわけ鮮やかです。

この彩り華やかな作品群のなかから、特に注目していただいた作品を、次に紹介いたします。

白紺糸威丸胴具足

江戸時代後期の紀伊徳川家当主が所用した、贅を尽くした



白紺糸威丸胴具足
江戸時代後期
資料番号 92202316・23・26・29・30・31

きん こ ざねかわ そでごんいとうきよにおしまるどろく そく
金小札変り袖紺糸妻紅丸胴具足
江戸時代
ミネアポリス美術館、
エセル・モリソン・ヴァン・ダーリップ基金所蔵
Photo: Minneapolis Institute of Art

復古調の具足です。

金色の小札を白と紺の糸で威し、兜の正面には俱利伽羅（不動明王の化身）の前立を飾っており、袖や臍当てには白檀塗りが施されています。また随所に据えられた三ツ葉葵紋の金具も見どころです。いかにも戦場より儀式の場が似合う具足といえましょう。

染分縮緬地櫻菊青海波文様友禪染振袖

友禪染の振袖で、おそらくは



重要文化財
染分縮緬地櫻菊青海波文様友禪染振袖
江戸時代中期
丸紅株式会社所蔵
展示期間：7月10日(土)～8月9日(月)

晴着としてあつらえられたものでしょう。この染色技法は、江戸時代中期に発達し、裕福な町人階級の女性の衣装に多用されました。

背裏には墨書銘が書かれた布地が貼られています。そこから、江戸浅草見附脇の町名主小西喜左衛門が、1730年(享保15)に19歳で亡くなった愛娘の供養のため、菩提寺に奉納した娘の形見の品とわかります。着用者と製作時期がほぼ特定できる貴重な作品です。

獅子頭

江戸の鹿嶋屋といえ、下り酒問屋の鹿嶋清兵衛家(本店)が有名です。同家4代清兵衛は、深川島田町に分家の東店を出し、清左衛門を名乗りました。鹿嶋清左衛門の東店は江戸時代後期から幕末にかけて経営を拡大し、本店にも劣らぬ、江戸屈指の本店に成長しました。この商店が鹿嶋屋東店です。

鹿嶋屋東店では、屋敷神で

あつたと推測される富永稲荷を信仰していました。当館は稲荷社の社殿をはじめとするさまざまな資料を所蔵しています。獅子頭もそのひとつで、1858年(安政5)3月に招福や疫病退治を祈願して、富永稲荷に奉納されたものです。富永稲荷の神前での獅子舞には、獅子頭の製作・奉納にかかわった多くの人々が集まり、賑々しく行われたことが想像されます。

このほかにも、徳川家光所用の乗物、富永稲荷の祭礼で用い

られた四神旗など、迫力ある作品が展覧会を盛り上げます。ほとんどが日常のなかのハレの場面に登場した作品です。ハレの場は明日への活力を生み出します。このことは江戸時代に限ることではなく、現代のわれわれも等しく感じることで、もうひとつのハレの場になれば幸いです。(学芸員 川口友子・小酒井大悟・齋藤慎二)

information

特別展

「大江戸の華

— 武家の儀礼と商家の祭 —」

開館時間：午前9時30分～午後5時30分

※入館は閉館の30分前まで

休館日： 毎週月曜日(ただし7月26日、8月2・9・16・30日、9月20日は開館) および8月10日(火)

※会期中に展示替えがございます。

※新型コロナウイルス感染症などの状況によって、会期・休館日・開館時間・観覧料・各種割引サービス等を変更する場合がございます。

主催： 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館、読売新聞社、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会

観覧料(税込)	特別展専用券	特別展・常設展共通券	特別展前売券
一般	1,400円(1,120円)	1,600円(1,280円)	1,200円
大学生・専門学校生	1,120円(890円)	1,280円(1,020円)	920円
中学生(都外)・高校生・65歳以上	700円(560円)	800円(640円)	500円
小学生・中学生(都内)	700円(560円)	なし	500円

※()内は20名以上の団体料金。

※次の場合は特別展観覧料が無料です。未就学児童。身体障害者手帳・愛の手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・被爆者健康手帳をお持ちの方と、その付き添いの方(2名まで)。

※小学生と都内在住・在学の中学生は、常設展示室観覧料が無料のため、共通券はありません。

※開館時間の変更やシルバーデーの実施については、江戸東京博物館のホームページをご確認ください。

※前売券は、7月9日(金)まで販売。7月10日(土)から会期中は当日料金で販売。

※会場内の過密防止のため、入場制限や事前予約制を実施する場合があります。最新の情報は、当館ホームページをご確認ください。

〈チケット販売所〉江戸東京博物館、主要プレイガイド

※特別展・常設展共通券の販売は江戸東京博物館のみ(予定)。

鹿鳴屋東店に伝わった獅子頭と箱書き

学芸員 小酒井大悟・文

鹿 嶋屋東店は、江戸の代表的な下り酒問屋である鹿嶋清兵衛家の4代当主が、1826年(文政9)に深川島田町(現・江東区木場)に出した隠居店である。東店の当主は、代々清左衛門を名乗り、大名家を相手とした金融(大名貸し)などを軸に、幕末にかけて経営を拡大した。幕府に対しても、多額の金を上納したり、貸したりしている。とくに、1866年(慶応2)には、第2次長州戦争にあたり、1万3千両もの御用金を幕府に供出しており、その経営規模の大きさがうかがい知れる。

東店の屋敷地には、富永稲荷という稲荷社があった。稲荷は商売繁盛への期待から屋敷神として、江戸の商家によって祀られた。富永稲荷も同様で、東店や一族の発展が祈願されたと考えられる。富永稲荷では、毎年いくつかの祭が執り行われており、そこで奉納された獅子舞に用いられた獅子頭が、現在に伝わっている。(写真1)

雌雄一对で、大きな角のある方が雄、丸い宝珠のついた方が雌である。表面は漆塗りで奥行きのある餡色に輝き、頭上の角や宝珠、目、歯などには金があしらわれている。耳やあごは、取っ手の操作で動かすことができる。

この獅子頭で注目されるのは、収納用の木箱の箱書きから製作年代や奉納者がわかることである。

写真2は雌の木箱の蓋裏で、製作年代と奉納者の名前が墨書されている。これによると、雌は1858年(安政5)3月に製作され、居所の深川島田町以外の20を越える町で東店が所持する町屋敷の家主(管理人)たちによって奉納された。奉納の世話人を務めたのは家主・熊吉のほか、東店が抱える鳶・吉五郎、そして東店に出入する植木屋・市兵衛の三名であった。

写真3は雄の木箱の蓋裏である。雄は、製作年代と世話人が雌と同じだが、奉納者が異なる。こちらには、出見世(出店)、角店、材木店といった東店の分家や三井越後屋など取引先の関係者のほか、駕籠屋、八百屋、魚屋、豆腐屋、指物師、大工、左官など、東店に出入する多数の商人・職人たちが名を連ねている。

富永稲荷の神前で行われた獅子舞は、東店の家族や奉公人のみならず、こうした獅子頭の奉納者らも参加したのではないか。写真2・3の箱書きからは、東店の獅子頭の由来とともに、富永稲荷の祭の様子、そして、東店の町屋敷集積の規模や交流の範囲が明瞭に見て取れる。獅子頭はもちろんだが、製作年代や奉納者が記された収納用の木箱もまた、東店など江戸の大手の暮らしを究明するうえで、手がかりを与えてくれる貴重な資料といえる。



写真1 獅子頭
1858年(安政5)3月
資料番号 98002312~3、
98002376~7



写真3 獅子頭(雄)の箱書き
1858年(安政5) 資料番号 98002312



写真2 獅子頭(雌)の箱書き
1858年(安政5) 資料番号 98002313

次回特別展予告

10月9日(土)〜12月5日(日)

縄文2021
— 東京に生きた縄文人 —

1万年以上にわたって続いた縄文時代。この長い時代を生きた縄文人の「生」の暮らしぶりとは、どのようなものであったのでしょうか？ 当館では、江戸の暮らしや文化をふり返る礎として、その源流とも言うべき縄文時代の人々、特に東京の縄文人の暮らしに焦点をあてた展覧会を開催します。

当館では、これまで江戸東京の様々な暮らしや文化を歴史資料に基づいて復元・再現した展示を行ってきました。その実績を活かし、最新の調査成果から考える縄文時代像を展示します。

その際、縄文時代の出土品が、どのような場所でのどのように利用されていたか、生活空間や道具を復元模型や映像などを用いて具体的に再現し、当時の生活の復元を試みます。

東京という地域の縄文時代



土偶
板橋区赤塚城址貝塚出土
縄文時代後期
江戸東京たてもの園所蔵
資料番号 99345611

企画展

相撲の錦絵と江戸文化

7月17日(土)～9月5日(日) 常設展示室 5F企画展示室



江都勸進大相撲浮絵之図 勝川春章/画 相撲博物館所蔵
谷風と小野川の取組を描く。

相撲観戦は、江戸時代から今日に
続く、庶民の娯楽のひとつです。ただ
し江戸の相撲は、一娯楽にとどまらな
い多様な広がりを見せ、人々の生活

のなかに染み渡っていきます。本展で
は、当館の隣にある両国国技館内の
相撲博物館と国立劇場の協力を得
て、江戸の相撲の多様な魅力をお伝
えます。

えします。

相撲は職業(プロ)

力士集団の活躍によ
り、江戸時代中頃には
庶民の娯楽として定着
します。1791年(寛
政3)には、11代將軍
徳川家齊が江戸城内
で相撲を直々に観覧す
る「上覧相撲」が行わ
れ、力士たちの社会的
地位は確たるものとな
ります。上覧相撲に先
立つ1789年(寛政
元)には、63連勝とい
う大記録で爆発的な人気
を誇った谷風たにかぜ楓かほ之助のすけ

と、それを破って人気を得た小野川おのがわ
喜三郎きざぶろうに、「横綱免許」が与えられま
す。横綱をしめて土俵入りをおこな
う資格を与え、強豪力士を格付け
る慣習が、このときにはじまりました。

こうして相撲が隆盛を極めたこ
ろ、時を同じくして黄金期を迎えた
のが、多色摺りの木版画「錦絵」です。
それまでの画一的で素朴な相撲版画
とは異なり、力士ごとに異なる体形
や顔の特徴を捉えた相撲錦絵が登場
します。相撲錦絵は、一人立ちや二人
立ちの立ち姿にはじまり、土俵入り
や取組の様子、土俵を中心に場内全
景を描くもの、力士の群像や着物姿
に宴会風景など、豊富なバリエーショ
ンを生みながら発展します。

人気力士の姿や相撲観戦の賑わい
を臨場感たっぷりに伝える錦絵は、興
行の熱狂を支えた立役者です。スター
力士の人気を支えるためにも、相撲





谷風梶之助 勝川春亭/画 相撲博物館所蔵



谷風の横綱 個人蔵

寛政力士群像 相撲博物館所蔵
怪童力士大童山文五郎を取り囲み見守る力士たち。
左端に立つのは谷風。



錦絵はなくてはならないものでした。鼻肩の力士の錦絵を二早く手に入れた

いと人々のもとに広めるため、顔と化粧廻しだけを差し替えて版木を使い直すなど、制作効率を図っていた様子もうかがえます。本展では、

先述の横綱谷風や、19世紀前半に活躍した横綱稲妻雷五郎の面影を伝える錦絵とともに、彼らが使用した横綱や化粧廻しをあわせて紹介します。

絵に描かれたのは、強豪力士たちだけではありません。江戸の相撲興行では、特別に体格がよい「大男」や「怪童」が、「土俵入」専門の力士となつて会場を沸かせました。巨人力士生月鯨太左衛門や怪童力士大童山文五郎は、数多くの浮世絵師たち

によつて盛んに描かれ、多くの絵がのこっています。

相撲は興行だけでなく、様々な人々の生活に根付いていました。例えば子供たちは相撲をまねるだけでなく、双六や立版古といった玩具絵でも、相撲に親しんでいました。また、

力士の名前を序列順に並べた相撲番付は、そこから発展してあらゆるもののランキングを示す見立番付の数々を生みます。

相撲の興行は幕末に両国回向院境内に固定されます。その両国

に、1909年(明治42)、常設の相撲場「国技館」が建設されます。ここ「相撲の街」で、後に日本を代表するスポーツと芸術へと発展する相撲と

錦絵の協奏をお楽しみください。

(学芸員 春木晶子)



日本大相撲関取 生月鯨太左衛門
歌川芳虎/画
資料番号 94200274

新収蔵品の紹介

令和2年度も、みなさまのご協力によって、多くの博物館資料を収集することができました。その一部をここに紹介いたします。

*各資料の解説は、寺田早苗、江里口友子、市川寛明、大城杏奈、岡本伽椰が担当しました。

1

人々の遊樂とともに 二大聖地を鮮やかに描く

右隻に夏の浅草寺せんそうじと隅田川、左隻に春の寛永寺かんえいじと不忍池しのぶのいけを描いた六曲二双の屏風です。浅草寺と寛永寺を対にした、いわゆる、隅田川の舟遊びふなあそびと上野の花見の主題は、18世紀初頭から前期にかけて流行し、浮世絵師や流派に属さぬ町絵師らによつて数多く制作されました。この屏風の景観年代は、明暦の大火後に架橋された両国橋が描かれているので、1659年(万治2)(1661年(寛文元)説もあり)から寛永寺清水観音堂しみずくわんおんどうが現在地に移る以前の播鉢山はりばちやまにあった1694年(元禄7)までの間です。絵師は制作時より前の浅草と上野の光景を描いたと思われる。

舟上で手持ち花火に興じる一行や、花見の席で三味線の音に合わせて踊る人々など、賑やかな様子を細やかに捉えており、ひとつひとつの光景を見ていくと、時間がたつのを忘れてしまふような資料です。



右隻



左隻

上野浅草図屏風 18世紀前期

2

北斎が孫娘の嫁入りに 贈った絵

葛飾北斎(1760~1849)の子孫の家に伝来した肉筆画で、水面の波紋なみの越しにゆつたりと泳ぐ鯉を描いています。

本図を収める木箱には、北斎のひ孫、白井孝義たかよしによる箱書があり、蓋表に「葛飾北斎画 水中之鯉」、蓋裏には曾祖父の北斎が、孝義の母多智たちの嫁入りにあたり贈ったという伝来が記されています。

多智は、北斎にとつては次男の長女、即ち孫娘です。孝義は、北斎伝記の基本書とされる『葛飾北斎伝』(飯島虚心/著、1893年(明治26))の執筆時に取材に応じ、北斎とその娘応為おちいに関する伝聞を残しています。

作品のみならず、その来歴と北斎にまつわる家伝なども貴重な記録で、今後の北斎研究上、重要な資料といえるでしょう。



鯉図 葛飾北斎/画 1839年(天保10)

3

江戸の山王祭礼で巡行された 山車の精密なミニチュア模型

江戸の人形師・松雲齋徳山が、日本橋付近にあった4つの町（瀬戸物町、小田原町二丁目・二丁目、伊勢町）から発注を受け、1848年（嘉永元）に製作した「山王祭礼静人形山車」の雛形です。この場合の雛形とは、祭礼山車の製作を受注した人形師が、山車本体の納品に先立ち、できあがりの詳細を発注元の町に説明して了解を得るためにつくられた、精密なミニチュア模型のことです。将軍上覧の祭礼として繁栄を極めた山王祭礼ですが、明治維新後は、山車の曳き廻しが禁止されたこともあって、山車のなかには地方に売却されるものもありました。この雛形の本体にあたる「山王祭礼静人形山車」も、1874年（明治7）に栃木県栃木市の有志へと売却され、現在も「とちぎ秋まつり」で使用されています。江戸時代に作られた山車とその雛形が、揃って確認される希有な事例といえます。



山王祭礼静人形山車雛形
松雲齋徳山／作 1848年（嘉永元）

4

名門竿師の技を今に伝える 江戸和竿の美

水辺に恵まれた江戸で、釣りを楽しむ人々に愛用されてきたのが、江戸和竿です。竹から作られる継ぎ竿で、現在は東京都伝統工芸品に指定されています。釣る魚の種類や釣り方によって竿の長さや重さなどに違いがあり、竹の切出しから漆塗りまで、竿師が一貫して製作します。

収蔵品の作者である竿忠は、江戸和竿を発展させた江戸時代後期の泰地屋東作の系譜を継ぐ、竿師の名門です。収蔵品には、竹の節の下に漆で影をつける節影塗りや、漆を胡麻のように盛り上げて打つ胡麻塗りなど、竿忠の高い技術の証が見て取れます。実用品でありながら、美術工芸品としても価値の高い資料です。



江戸和竿（小鯛竿）銘 魚心水心
二代竿忠／作 1940年（昭和15）

5

写真家・師岡宏次の写した 銀座

師岡宏次（1914～1991）は、昭和初期から50年以上をかけて、東京の街角を撮影した写真家です。雑誌の編集者でもあった師岡は、グラフ・ジャーナリズム的な視点で、変わりゆく風景の「いま」を撮影しました。なかでも銀座は、師岡が特に多く撮影した場所です。戦前の銀座を闊歩したモダンガール達の生き生きとした表情や、戦後の銀座が被った戦禍の様子、あるいは散歩のついでに撮った何気ない路地など、多くの写真を残しました。ひとりの写真家が長い時間をかけて銀座を撮影し続けたことにより、今はもう思い出の中でしたか訪れることのできない建物やネオンサインなど、往時の銀座の様子を写真でみることができず。



銀座7丁目
東和宝石店前の若者
師岡宏次／撮影
1973年（昭和48）



銀座7丁目
長寿庵前の若者
師岡宏次／撮影
1939年（昭和14）

レターヘッドに描かれたデ・ラランデ邸

学芸員 早川典子・文



デ・ラランデより廣田理太郎宛書簡(部分)

1912年(明治45)1月13日
資料番号 14240154

専門雑誌に掲載されていた住宅が、新宿区信濃町に現存していた事例ということで、江戸東京たてももの園の重要な移築候補建造物に挙げられた。当時の雑誌の記述内容から、明治末期ごろにデ・ラランデによって新築されたと考えられていた。しかし、移

江 戸東京たてももの園に移築されたデ・ラランデ邸。ゲオルグ・デ・ラランデは、1872年(明治5)生まれ。1903年(明治36)に来日したドイツ人建築家である。神戸市にある重要文化財トーマス家住宅(風見鶏の館)の設計者としても知られる。

この建物は、明治、大正期の建築

築のための解体調査の結果、基となる平屋建ての建物があり、それを改造・増築するという方法で建てられたことが判明した。その建物は、痕跡から瓦葺き・寄棟屋根・下見板張りの洋館であり、また『日本紳士録』等の記載内容などから、気象学者・物理学者である北尾次郎が住んでいたことがわかった。



デ・ラランデ邸南東外観

1908年(明治41)4月7日付の英字新聞『THE JAPANESE TIMES』には、デ・ラランデ建築事務所に関する広告掲載があり、1908年4月に東信濃町29に移転したことが確認されるという。また『幕末明治在日外国人・機関名鑑』を見るとデ・ラランデは1908年から1909年にかけて名前の掲載がなく、この間にドイツに一時帰国していたと推定される。

当時の文献資料からは、この建物の増築がいつ行われたのかは、わかっていない。もちろん、建物からも年代

がわかるような痕跡はみつかっていない。ドイツへの一時帰国の前なのか後なのか、謎である。このため、現在は「1910年ころ」という表記としている。

江戸東京博物館では、工学者・実業家であった廣田理太郎ひろた りたろうの自邸に関する資料を所蔵している。廣田理太郎邸の設計者はデ・ラランデである。これらの資料には、設計者であるデ・ラランデと廣田理太郎の書簡が56点含まれている。そのなかにレターヘッドに、デ・ラランデ邸がデザインされているものがある。デ・ラランデは、この資料群の中でレターヘッドのデザインを7種類行っており、時期によって使い分けていたようである。

このレターヘッドは、1911年(明治44)12月20日付の書簡で初めて登場し、1912年(明治45)7月ごろまで使用されている。少なくとも、1911年には増築は終了していたことが確認できる。推論の域を出ないが、三階建てへの増築は、この時期の少し前になるのではないかと、想像している。

江戸博コレクションから
喜多川歌麿『画本虫撰』

江戸時代前期、公家を中心に上方で流行していた狂歌は、後期に入ると江戸にその舞台を移し、武士から身分を超え、庶民にまで浸透していききました。天明期（1781～1789）になると狂歌は絶大な人気を博し、やがて絵画とも結びついて、浮世絵師による豪華な絵入狂歌本も多く刊行されるようになります。

喜多川歌麿は1788年（天明8）から1790年（寛政2）のわずか3年の間、版元の葛屋重三郎から豪華な絵入狂歌本を7種刊行します。その中でも生き物を主題とした『画本虫撰』、『潮干のつと』、『百千鳥狂歌合』は歌麿の代表的な狂歌絵本として知られています。

7種の中で最も早く刊行された『画本虫撰』は、見開きに2種類の虫と草花、そしてそれを詠んだ狂歌が2首掲げられています。跋文（後書き）には歌麿は幼い頃から虫をめでていたとあり、細かな観察による写実性もみどころで

す。
木版による虫草の描写の傑作ともいえる『画本虫撰』は、美人画で名高い歌麿の新たな一面とその魅力も伝えられます。
（学芸員 朴美姫）



画本虫撰
喜多川歌麿／画
宿屋飯盛／撰
上巻 1788年（天明8）刊
資料番号 97200265



図書室から
お知らせ

図書室の仕事 Vol. 5

原形保存

「本」を未来に伝えるために

当館図書室では、蔵書の「原形保存」を行っております。これは図書資料をなるべく発行時の原形のまま、箱や帯まで保管すると同時に、閲覧や展示にも利用できるよう考慮した保存の方法です。資料には長期保存に適したポリプロピレン製のカバーを1点ずつ、樹脂用のカッターで適切なサイズに加工して装着します。バーコードやラベルは着脱可能なそのカバーの上から貼付することで、カバーを外せばいつでも発行時の状態に戻して、展示に使用することも可能です。

電子媒体など物体としての形を持たない出版物が増えている昨今、形ある「本」は、紙などの素材、印刷や製本技術、デザイン、装幀など、内容以外でも時代の技術や文化を象徴的に反映するモノでもあり、その原形を保存することの意義は、今後さらに増していくことでしょう。貴重な文化の結晶である「本」を、これからも広く皆さまにご覧いただき、永く未来へ伝えていけるよう、努力を続けていきたいと思っております。

※国立国会図書館が運営する「レファレンス協同データベース (<https://cd.ndl.go.jp/reference/>)」事業への貢献が認められ、6度目の表彰を受けました。レファレンス事例集は当館のホームページでも公開しています。ぜひご覧ください。

※「夏休み！こども歴史学習相談」を今夏も開催予定です。興味のあるテーマを見つけて、図書室で調べてみましょう！詳しくはホームページ (<https://www.edo-tokyo-museum.or.jp/purpose/library/>) やポスターをご確認ください。図書室のご利用は無料です。



たてもの夏支度

高温で湿気の多い日本の夏。かつて吉田兼好は『徒然草』に「家の造りようは、夏をむねとすべし(中略)暑きころわろき住まいは、耐えがたきことなり」と記しました。これから暑い夏を迎えるこの時期、各たてものでは夏支度が始まります。

西川家別邸や川野商店では、障子戸を夏用の「簾戸」に入れ替えます。簾戸は紙の代わりにすだれ状のものをはめ込んだ障子で、風通しのよい建具です。また吉野家や八王子千人同心組頭の家、武居三省堂など「大坂格子」が用いられているところでは、格子戸に4枚ほどはめられている小さな障子を外すことで風通しを良くします。このほか風鈴が家々に吊るされ、鍵屋の暖簾は白いものにかけて替えられるなど、涼しさを演出します。

エアコンがなかった時代の、夏のすまいの工夫を、ぜひ体感してみてください。

(学芸員 阿部由紀洋)
※たてもの園における各種行事・イベントについての最新情報は、たてもの園HPでご確認ください。



西川家別邸の簾戸

カフェ、レストランが新しくなりました！

2021年4月から、カフェとレストランともに新規店舗がオープンいたしました。
ぜひ、ご利用ください。

レストラン

江戸博砂漠

エジプトのコシヤリをはじめ、シャクシュカや、クスクス、ファラフェルサンドなど中近東で広く食べられている珍しいお料理をご提供いたします。

【営業時間】

10:30～18:00 (ラストオーダー17:30)



カフェ

セリーズ 江戸東京博物館店

第一ホテル両国のカフェ「セリーズ」が江戸東京博物館にオープン。
ケーキや軽食など、同ホテルで人気の味を当館でお楽しみいただけます。

【営業時間】

10:30～17:30 (ラストオーダー17:00)



*新型コロナウイルス感染症などの状況によって、会期・休館日・開館時間・観覧料・各種割引サービス等を変更する場合がございます。

江戸東京博物館 NEWS vol.113

お問い合わせ 03-3626-9974 (代表)

ホームページ <https://www.edo-tokyo-museum.or.jp>

来館のご案内 JR総武線「両国駅」西口から徒歩3分
都営地下鉄大江戸線「両国駅(江戸東京博物館前)」A3・A4出口から徒歩1分
都バス錦27・両28・門33系統 墨田区内循環バス南部ルート「都営両国駅前(江戸東京博物館前)」下車、徒歩3分

発行日 2021年6月18日(金)

編集・発行 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館
〒130-0015 東京都墨田区横網1-4-1

制作・印刷 株式会社D_CODE



表紙解説

しろりんず じせいがい ぼしなはなばも ようちかけ
白綾子地青海波花束模様打掛
江戸時代後期 資料番号 09200036

ひくだんめりほん ごおあおいたおひらべく せく
白檀塗本小札青糸威童具足
江戸時代中期 資料番号 97202513～31

華やかな打掛に、成長を祝う童具足。ともに武家の所用品であるが、その贅沢な仕様から、それぞれの所有者への思いが伝わってくる。江戸時代の晴れやかな一場面を物語っているといえよう。(学芸員 齋藤慎一)

